

不登校未然防止に向けた実践的研究

－「中1不登校」解消への取組を通じた不登校未然防止に向けた支援－

教育相談センター指導主事研究会議

指導主事 新井 紀代美 松崎 哲範 鈴木 廣和

I 主題設定の理由

1 川崎市における不登校児童生徒の現状から

文部科学省の調査によると、平成21年度全国小中学校不登校児童生徒数は、小学校22,327人、中学校100,105人、計122,432人である。平成13年度をピークに漸減傾向にあるが、依然として10万人を超える高い数値を示している。

出現率をみると、平成21年度不登校児童生徒は、小学校0.32%、中学校2.77%である。川崎市における不登校児童生徒数は、小学校174人であり、出現率は0.25%である。中学校1,091人であり、出現率は4.05%となっている。中学校における不登校生徒の出現率は毎年全国平均を大きく上回っている。特に小学校6年生から中学校1年生にかけての不登校児童生徒の出現率は5.3倍になっており、学年が上がるごとに新たな不登校生徒が加わって、中学生の不登校数を押し上げているという状況がある。

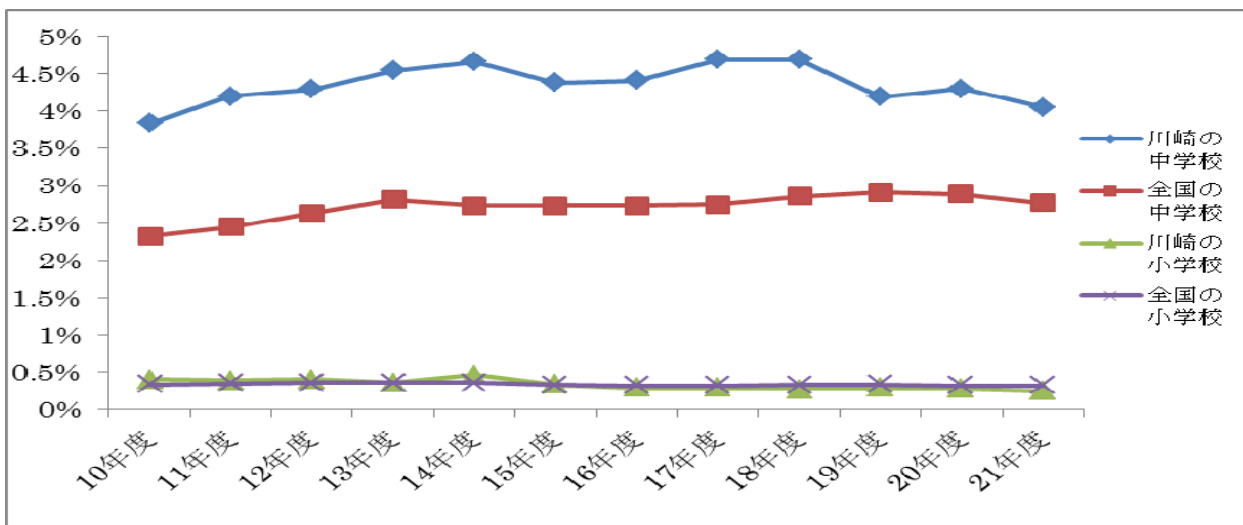


図1 不登校児童生徒数の出現率

2 教育相談センターの調査研究から

小学校6年生から中学校1年生の間に見られる不登校数の増加現象は、いわゆる「中1不登校」または「中1ギャップ」と呼ばれることがある。「中1ギャップ」という言葉の意味するところは、「小学生から中学1年生になったことがきっかけとなり、学習や生活の変化になじめずに不登校となったり、いじめが増加するという現象である」と新潟県教育委員会は定義づけた。小学校から中学校に入学した1年生が、学習や生活の変化になじめず、段差、壁を感じ中学校生活にスムーズに溶け込めないことが要因として考えられている。

教育相談センターでは、不登校児童生徒が学校復帰を果たすために様々な取組をしてきた。この「中1不登校」の解消をはじめとする不登校の未然防止・早期解決を図るための取組も大きな課題と捉えている。平成16年度に不登校対策推進事業「フレンドシップかわさき」を立ち上げ、主に小学校と中学校の連携や相互理解をめざした実践研究事業として現在も継続して進めている。

また、平成 19 年度からは、文部科学省からの推進委託を受け「問題を抱える子ども等の自立支援事業」を行っている。この事業は不登校対策に特化したものではないが、不登校の視点からこの事業に取り組んでいる。

平成 19 年度から毎年『学校生活』についての調査』を継続して実施してきた。調査開始時に小学校 6 年生であった児童を 4 年間追跡調査し、学校生活における子どもたちの変化を分析することで、これからの不登校未然防止に関する効果的な支援の在り方を探る。以上のことからこの主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究の方法と計画

平成 19 年度に A 中学校区の 3 小学校 6 年生に『学校生活』についての調査』を行った。それから 4 年間追跡調査を実施してきた。平成 21 年度まで行ってきた調査研究を基に、さらに今年度中学 3 年生になった生徒たちの学校生活の変化を分析した。また、並行して「学生による相談活動」を取り入れ、不登校の未然防止を実践的に進め、効果的な支援の在り方について探った。

(1) 「学校生活」についての調査

① 質問紙による調査

調査協力校の児童生徒を対象に質問紙『学校生活』についての調査』を平成 19・20・21・22 年度に各 1 回実施した。

② 調査対象

平成 19 年度：川崎市立 A 中学校区の小学校 3 校（6 年生 342 名）

平成 20 年度：川崎市立 A 中学校 1 校（1 年生 256 名）

平成 21 年度：川崎市立 A 中学校 1 校（1 年生 298 名・2 年生 272 名・3 年生 331 名）

平成 22 年度：川崎市立 A 中学校 1 校（3 年生 213 名）

③ 調査日

平成 19 年 7 月、平成 20 年 7 月（質問紙による調査）

平成 19 年 11 月～平成 20 年 3 月（小、中学校に派遣した学生による実態調査）

平成 20 年 6 月～平成 21 年 3 月（小、中学校に派遣した学生による実態調査）

平成 21 年 10 月、平成 22 年 7 月（質問紙による調査）

平成 21 年 7 月～平成 22 年 3 月（中学校に派遣した学生による実態調査）

平成 22 年 7 月～平成 23 年 3 月（小学校に派遣した学生による実態調査）

(2) 「学生相談員」による行動観察

小学校と中学校に学生ボランティアを派遣し、「学生相談員」として相談活動を実施した。特に、不登校懸念のある児童生徒に対して意図的にかかわるようにした。また、児童たちとのかかわりや授業中などの行動観察を通して得られた知見を考察の一助とする。

(3) 調査協力校へのフィードバック

(1)、(2)を通して得られた情報を調査協力校へフィードバックし、調査協力校の日常における児童生徒理解や不登校の未然防止につながられるようにする。

(4) 調査結果の検討方法

日本女子大学による分析結果を基に、大学の心理学研究室と教育相談センタースタッフが不登校の未然防止に関する効果的な支援の在り方について探求した。

2 研究の内容

(1) 質問紙による調査

『学校生活』についての調査」を平成 19 年度に A 中学校区 3 小学校 6 年生を対象に実施した。その児童たちに毎年同様の質問紙調査を 4 年間実施した。この質問紙の一つは学校に対する好き嫌い感情を問うものである。この質問項目は 1990 年代に子どもの「学校嫌い」感情と、その規定要因を探るための調査を参考にして作成した。質問項目には「わたしは学校に行くのが楽しみだ」「学校は楽しくて、1 日があっという間にすぎてしまう」等、13 の質問に対して、「よく当てはまる」「だいたい当てはまる」「どちらともいえない」「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」の 5 件法で回答するようにした。(質問 1)

もう一つは、「学校に行っている理由」を尋ねるものである。学校に感じている魅力と登校への規範意識につながる質問であり、これは 4 件法で回答するようにした。(質問 2)

その他に、学校生活の中での「楽しい時間」と「楽しくない時間」また、「学校に行きたくないと思ったことがあるか」そして、「そう思った時の理由」を尋ねた。さらに「休みたいと思った時に休まなかった理由」等については、自由記述で回答するようにした。平成 22 年度の調査については「学校に通っている理由」を問う質問項目を 2 問増やした。いずれの調査結果も男女別に表すことによって、学年や男女による感じ方、考え方の違いが明らかになり、かかわり方や支援の仕方に役立つのではないかと考えた。小学 6 年時・中学 1 年時・中学 2 年時・中学 3 年時の 4 年間すべての調査に回答している生徒 213 名の変化について縦断的に検討した。

(2) 学生相談員による相談活動

学生の派遣は、子どもたちと年齢が比較的近く、兄弟姉妹のように気軽に話ができる相手が存在すれば、心に何か負担を感じている子どもが相談しやすくなり、その負荷を軽くできるのではないかとの発想から試みたものである。小学 6 年生と中学 1 年生を中心に相談活動を行った。学生相談員からは、子どもたちの日常生活の様子や授業中の行動観察を通して「中 1 不登校」に関する貴重な意見が出された。

(3) 実態調査の結果

① 学校享受感情

学校享受感情得点は学校に対しての「好き・嫌い」の感情を測る尺度と言える。得点が高ければポジティブな感情が高く、得点が低ければネガティブな感情が高い。結果をみると、小学 6 年生から中学校に入学した段階で、平均が少しポジティブな方向に変化している。「中 1 不登校」の議論の中では、小学校から中学校の環境移行が生徒にとって困難なものであるということがよく言われるが、むしろ中学校に入学して、新しい環境で張り切っている生徒の姿が見えてくる。小学校において発達の個人差が大きい中で、小学

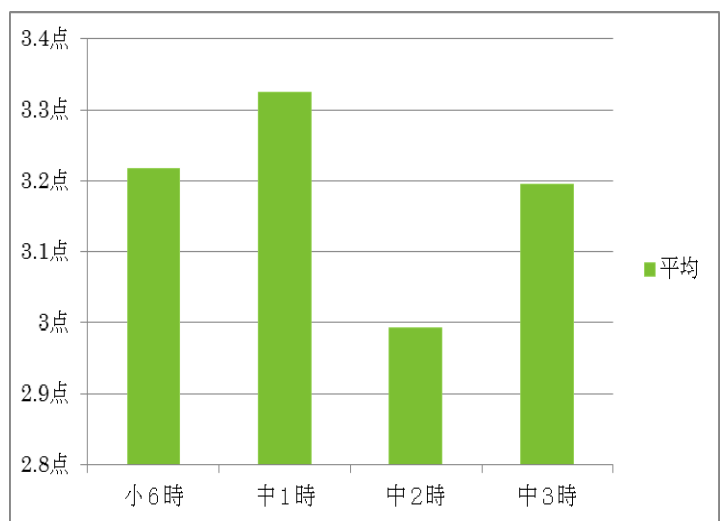


図 2 学校享受感情平均得点

校の環境に閉塞感を感じている児童は、中学校の環境にポジティブな感情を抱いていると考えられる。また、中学 2 年時では、学校享受感情得点平均が低くなっているが、中学 3 年時になると、また学校

享受感情の得点平均が再び高くなっている。

学年別の学校享受感情得点の分布をグラフにしたものが図3である。これを見ると、中学2年時のみグラフの形が異なっている。その特徴は、中央にピークはあるが、それより低い場所に2番目の大きなピークがあり、また、他の学年では3.60付近をピークとした2つ目の山があるが、中学2年時ではそれは見られず、逆に低くなっていることが分かる。

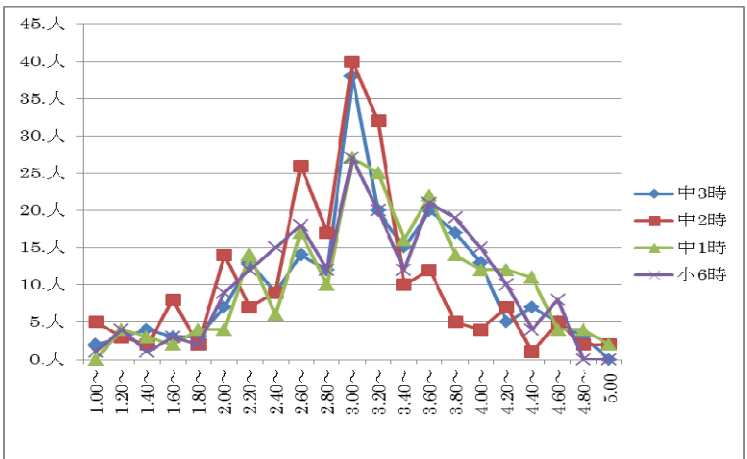


図3 学年別享受感情得点分布

(ア) 学校享受感情得点の性差

次の図4～図7は学校享受感情得点について、学年ごとの男女の違いを示したものである。

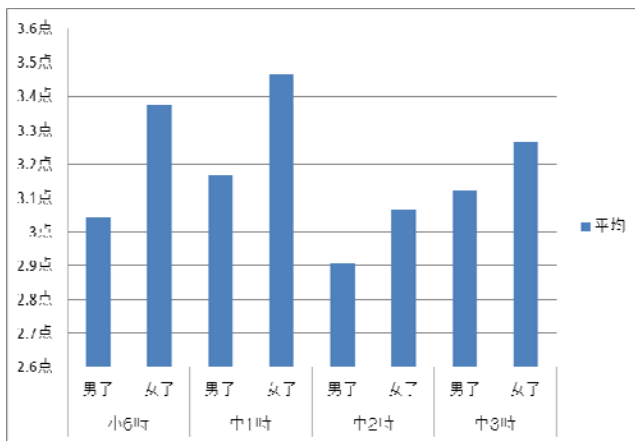


図4 学校享受感情 学年別・男女別の平均得点

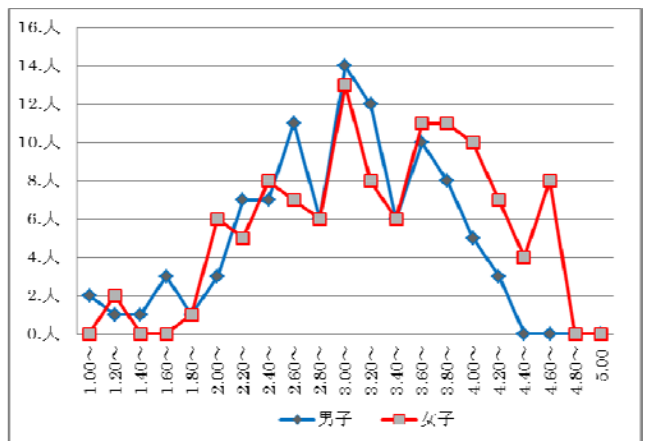


図5 男女別学校享受感情得点分布 (小6時)

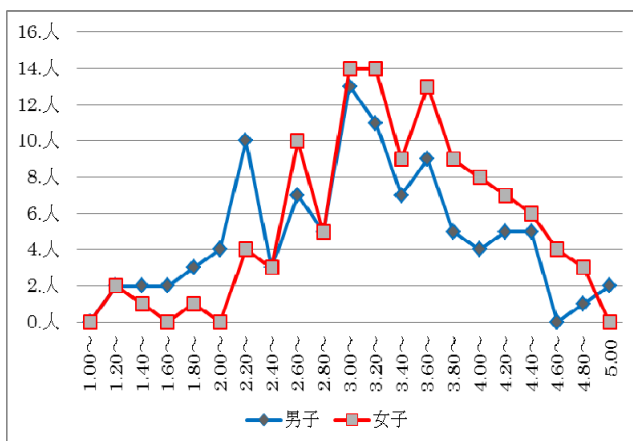


図6 男女別学校享受感情得点分布 (中1時)

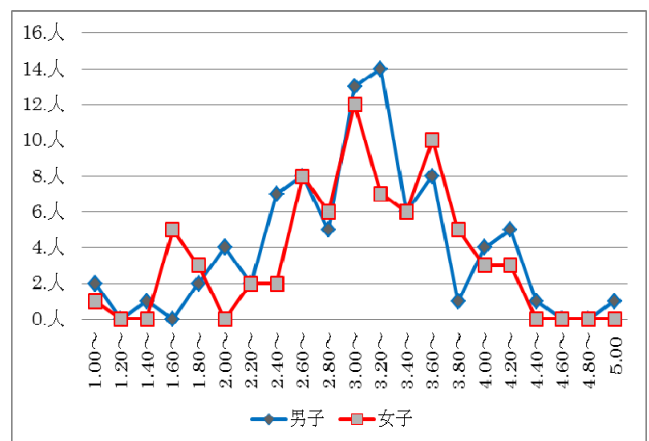


図7 男女別学校享受感情得点分布 (中2時)

小学6年時に比べて、中学1年時でポジティブ方向に変化し、中学2年時でネガティブ方向に変化が生じ、中学3年時でまたポジティブ方向に変化が生じるという小学6年時から中学3年時までの享受感情の変化は、男女ともに一致している。男子に比べて、女子の方が、学校享受感情がどの学年でも高く

なっている。女子の方が、学校享受感情が高い方に分布が寄っており、小学6年時と中学1年時でその傾向が大きいことがわかる。

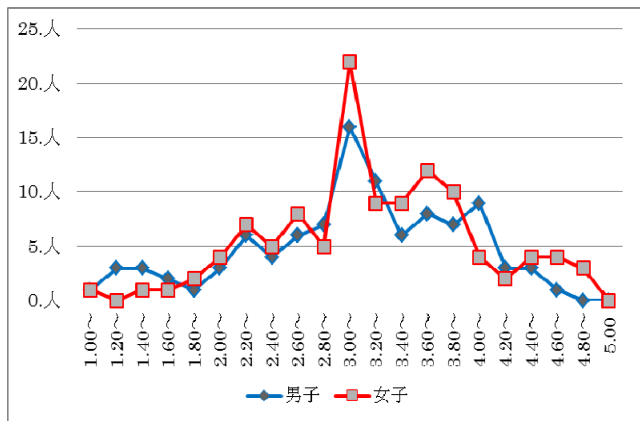


図8 男女別学校享受感情分布 (中3時)

(イ) 学校享受感情の個人ごとの得点変化 (小6→中1→中2→中3)

それぞれの生徒の小学6年時から中学1年時、中学1年時から中学2年時、中学2年時から中学3年時の学校享受感情の変化量をもとめ、その分布を示した (図9)。

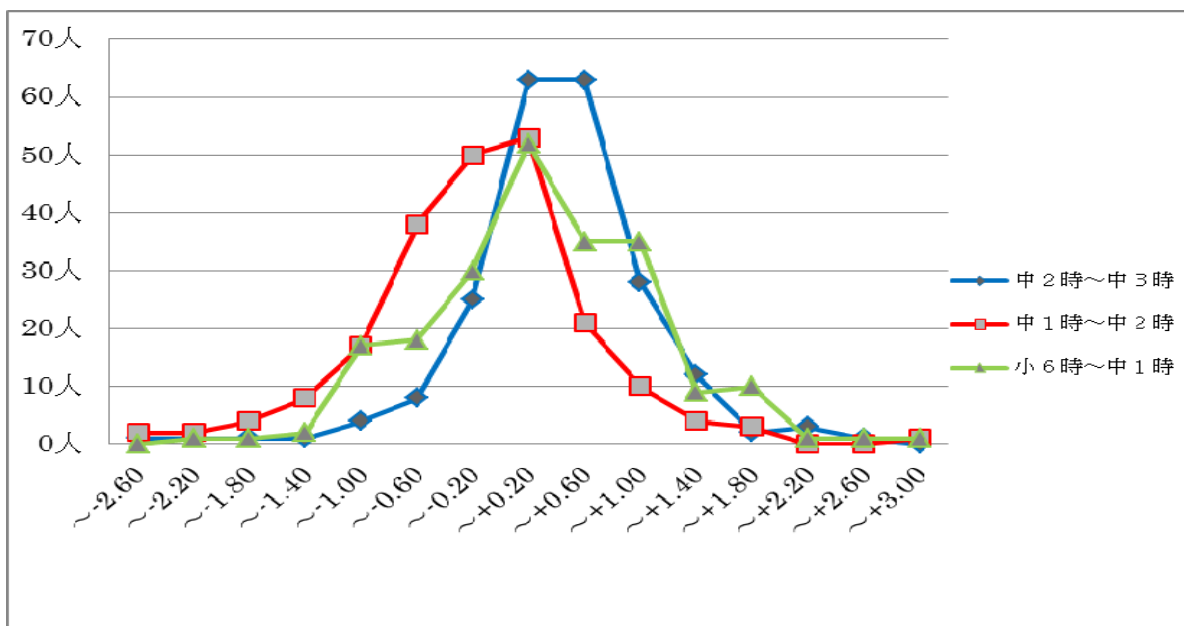


図9 学校享受感情変化量の分布

小学6年時から中学1年時での変化量と中学1年時から中学2年時の変化量を見てみると、グラフのピークは両方とも変化がない人数が最も多いが、小学6年時から中学1年時では、中央値より右側に2つの山があり、「少し学校が好き」の方向に気持ちが変わった生徒が多いことを表している。中学1年時から中学2年時の変化量の分布は、中央値の山が1つであり中学2年時になって好き感情が低下していることから、どちらかという「少し学校が嫌い」の方向に気持ちが変わった生徒が多いことがわかる。さらに、中学2年時から中学3年時では、気持ちの変化がない生徒に加えて、「やや学校が好き」の方向に変化した生徒の人数も多く、ピーク自体が好きの方向に変化しており、また、「学校が嫌い」の方向に変化した生徒は少なくなっている。中学2年時に比べて、かなりの生徒が「学校が好き」な方向に変化していることが分かる。

(ウ) 学校享受感情得点の変化

小学6年時から中学1年時、中学2年時、中学3年時の学校享受感情の得点の変化について「増加」「変化」「減少」の3つに分け、それぞれの人数について図10に表した。さらに、増加は変化量>0、変化なしは変化量=0、減少は変化量<0とする。(4年分のデータの揃っている生徒)

小学6年時から中学1年時で学校享受感情が増加し、中学1年時から中学2年時で減少、中学2年時から中学3年時で増加と、学校享受感情の得点平均と同じ流れで変化している生徒が59名と最も多かった。次に、小学6年時から中学1年時さらに中学2年時と減少し、中学2年時から中学3年時のみ増加した生徒が41名だった。そうした中、小学6年時から中学1年時・中学2年時・中学3年時と増加を続けている生徒が14名おり、中学校生活が充実していると思われる。反対に、小学6年時から中学1年時・中学2年時・中学3年時と減少し続けている10名については、指導に配慮が必要である。

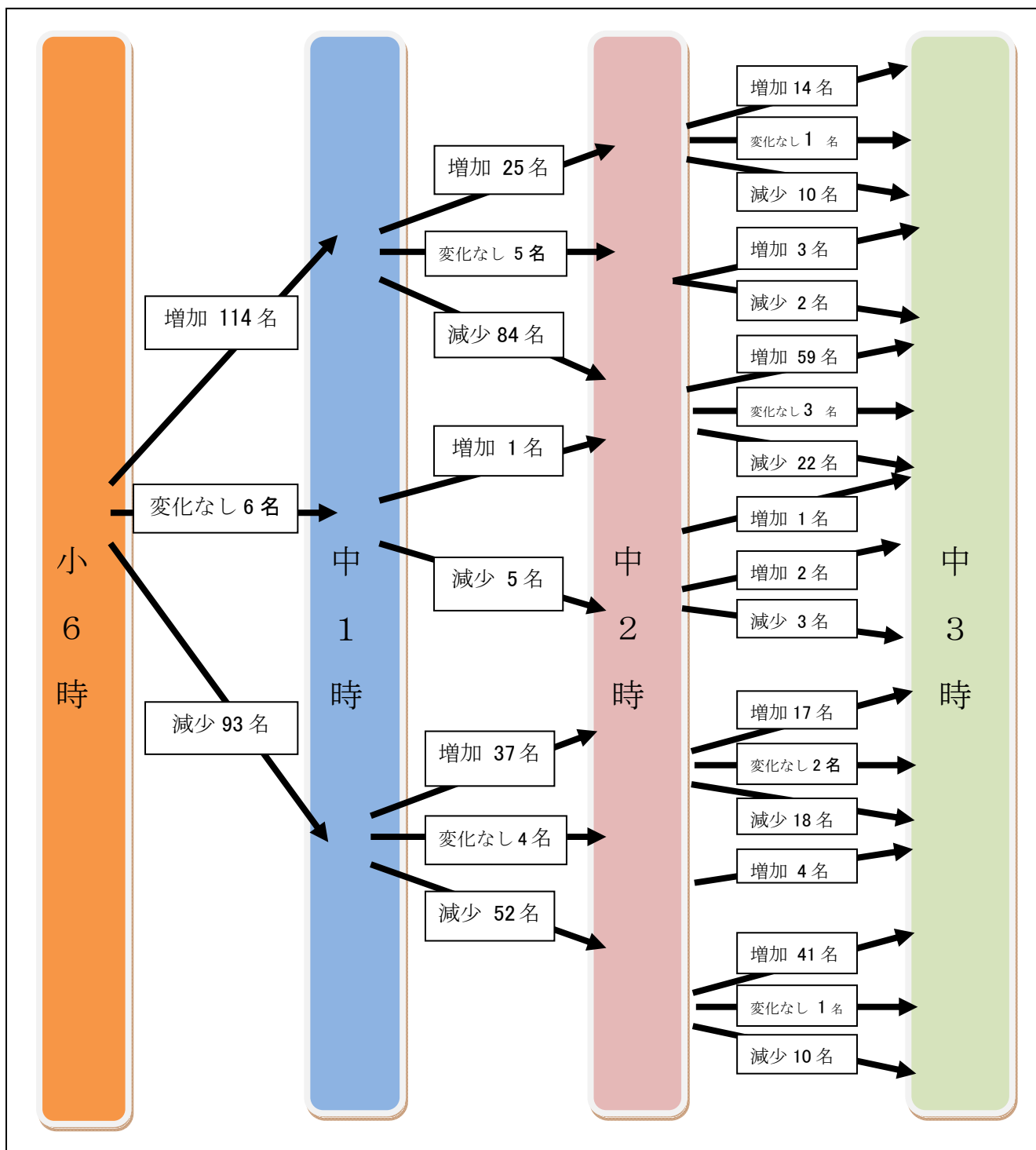


図10 学校享受感情得点の変化

②学校に行っている理由

登校理由については、平成22年度実施の質問項目に、「欠席日数を多くしたくないから」「自分の成長のため」の2項目を加えた。これは、平成21年度の調査の「学校に行きたくないと思った時、休まなかった理由」として自由記述の回答が見られた項目で、登校理由としても項目に加えることが望ましいと考えたことによる。中学2年 267名・中学3年 248名の全23項目について、因子分析を行ったところ、5つの因子が抽出された。

表1 学校に行っている理由（登校理由）

質問項目	F1	F2	F3	F4	F5
行くことが当然だから	0.974	-0.050	0.050	0.037	-0.178
あたりまえになっているから	0.799	0.083	0.133	-0.154	-0.127
行かないことは悪いことだから	0.656	-0.092	-0.051	0.134	0.123
義務教育だから	0.631	-0.173	-0.170	0.071	0.156
勉強しなければならないから	0.527	0.222	-0.032	-0.058	0.177
欠席日数を多くしたくないから	0.331	0.206	-0.062	0.008	0.232
自分でなにごとでもできる力をつけるため	0.003	0.675	-0.049	-0.025	0.174
自分の成長のため	0.107	0.670	0.053	-0.146	0.153
勉強したいから	-0.102	0.642	-0.056	0.018	0.102
楽しい授業があるから	-0.030	0.592	0.011	0.155	-0.124
好きな行事があるから	-0.017	0.532	0.169	0.198	-0.171
好きな先生がいるから	0.038	0.515	-0.070	0.243	-0.117
家にいてもつまらないから	0.036	0.332	0.022	0.109	-0.050
仲の良い友だちがいるから	0.039	-0.109	0.863	0.011	0.069
クラスの友だちと会えるから	-0.063	0.069	0.770	-0.061	0.021
休み時間が楽しいから	-0.035	-0.003	0.612	0.079	0.055
部活が楽しいから	-0.078	0.162	-0.060	0.686	-0.004
部活でみんなと差がつくから	0.120	-0.028	-0.047	0.644	0.132
部活の友だちと会えるから	0.034	0.010	0.199	0.641	0.076
好きな先輩・後輩がいるから	-0.026	0.215	0.009	0.296	-0.087
勉強でみんなと差がつくから	0.029	-0.044	0.084	0.031	0.813
勉強がおくれるから	0.091	-0.029	0.035	0.086	0.775
将来のため	0.151	0.266	0.008	-0.102	0.407

この因子をそれぞれに対し、次のような名称をつけ、中学3年時の登校理由の因子得点を男女別に比較した。

F1：「登校義務」因子…学校に行くことは当然なこと。行かないことは悪いことであるという気持ち。

F2：「積極的登校意欲」因子…自分の成長のために力をつけたい。勉強したいという積極的な気持ち。

F3：「友だち」因子…親しい友だちがいて
休み時間が楽しいとする気持ち。

F4：「部活」因子…活動そのものの楽しさ
や友だちに会いたい気持ち。

F5：「学習義務」因子…勉強で遅れたくないという気持ち。

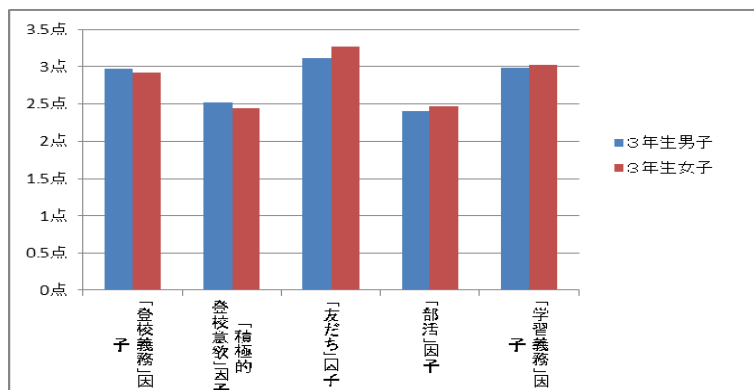


図11 登校理由因子別平均得点 男女別（中3時）

登校理由としては、「友だち」が最も高く「学習義務」「登校義務」がこれに続いた。

男女差は「友だち」について、女子の方が登校理由としていた。それ以外の因子については顕著な男女差は見られなかった。

学校享受感情の高低によって、登校理由にどのような違いがあるかを検討するために、学校享受感情の得点により、中学3年生の生徒を2群に分けた。学校享受感情得点の中央値3.15よりも大きい生徒を「H群」とし、小さい生徒を「L群」とした。各群ごとに登校理由の各因子の得点を求めたのが図12である。

学校享受感情の高低によって、「登校義務」「学習義務」を登校理由とする気持ちにはあまり大きな差はなかったが、「積極的登校理由」「友だち」「部活」は、学校享受感情が高いグループの方が、低いグループよりも、登校理由とする気持ちが大きかった。

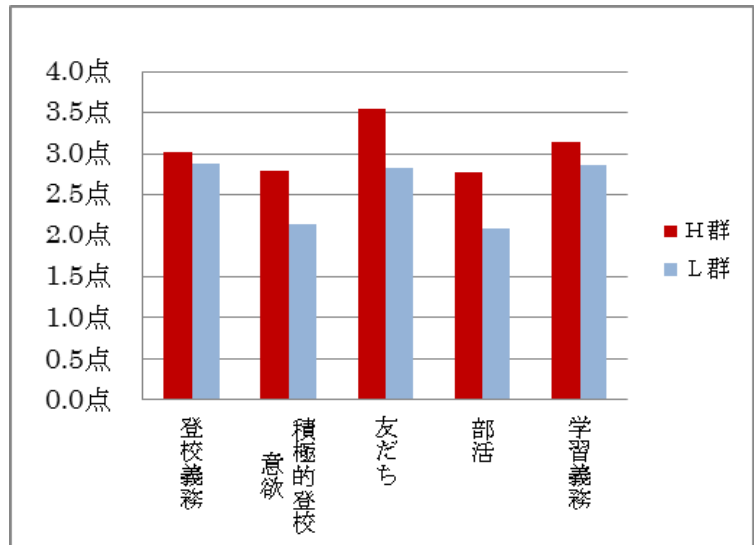


図12 学校享受感情H群・L群の登校理由因子別平均得点(中3時)

③学校生活の中で楽しい時間

「学校生活の中で楽しい時間」について自由記述で回答を求めた。具体的に記入された回答(複数回答あり)を分類すると図13のような結果となり、それを男女別に比較したのが図14である。

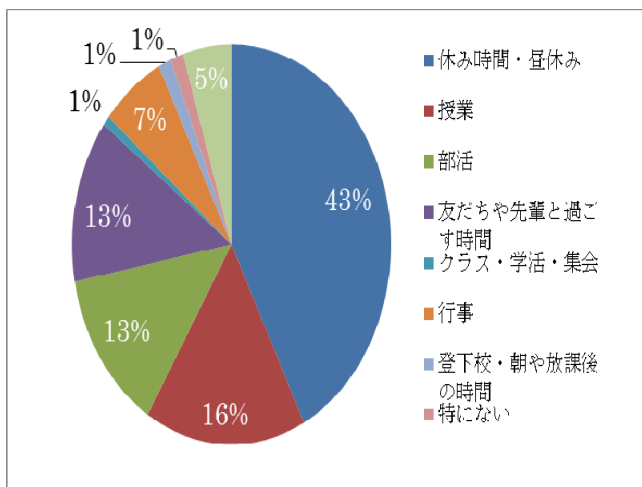


図13 学校生活の中で楽しい時間 (中3時)

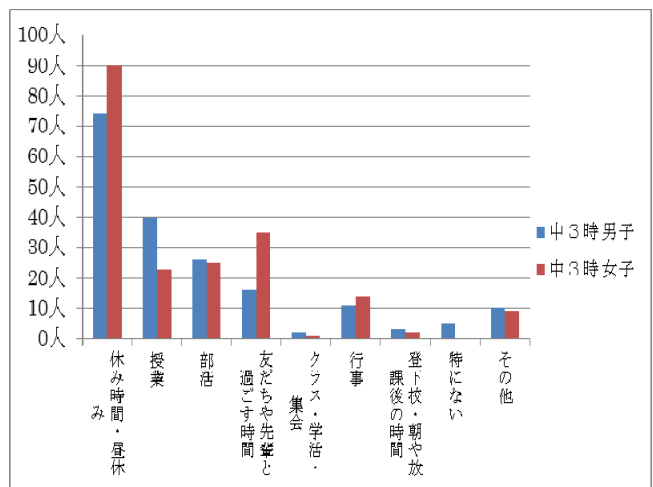


図14 学校生活の中で楽しい時間 男女別(中3時)

この結果からは男女による大きな違いは見られないが、「友達と過ごす時間」を楽しい時間とするのは女子のほうが多いことが分かった。また、「授業」が楽しいと回答している生徒は、女子に比べて男子の方が多くなっている。

さらに、学年別に「楽しい時間」の割合を、図15に示した。小学6年時では「授業」をあげる割合が25%以上あるが、中

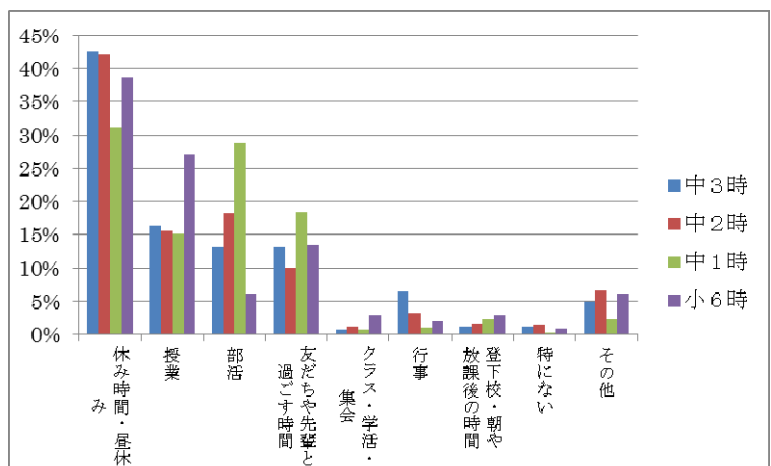


図15 学校生活の中で楽しい時間 学年別による変化

学生は15%程度にとどまっている。また、どの学年も「休み時間・昼休み」の割合が高い中、中学1年時については「部活」をあげる割合が高い。

また、中学3年時は他学年に比べて「行事」の割合が高いという特徴が見られる。さらに、男女別に「楽しい時間」の学年進行による変化を、図16、図17に示した。学年別の性差による特徴が見られた項目は、男子では、中学1年時の「部活」が高く、女子では、特に中学1年時で、「友だちや先輩と過ごす時間」が高い得点となっている。

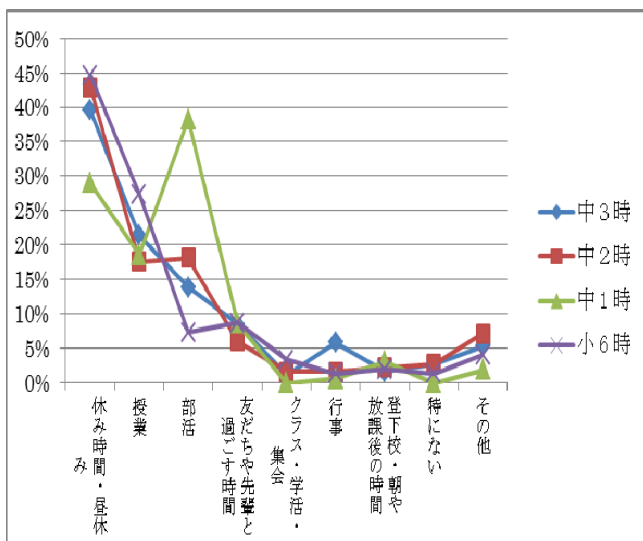


図16 学校生活の中で楽しい時間 男子学年別変化

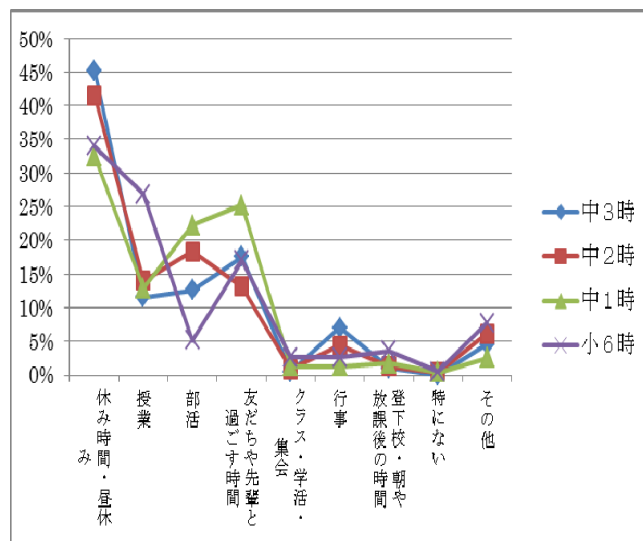


図17 学校生活の中で楽しい時間 女子学年別変化

④学校生活の中で楽しくない時間

「あなたが学校生活の中で、楽しくないと思う時間はなんですか？」と自由記述で回答を求めた。

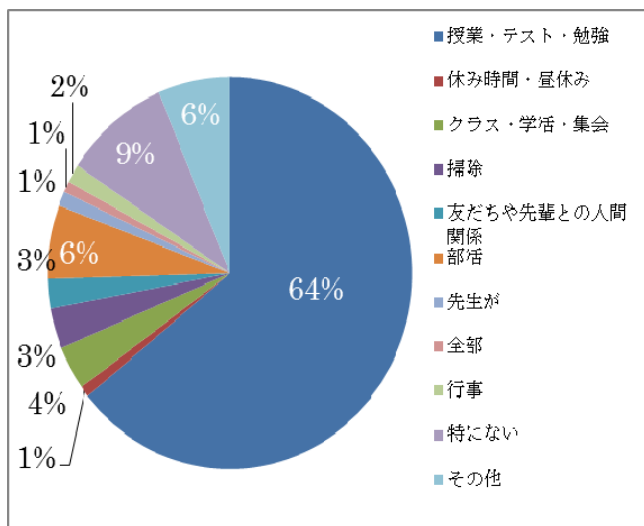


図18 学校生活の中で楽しくない時間(中3時)

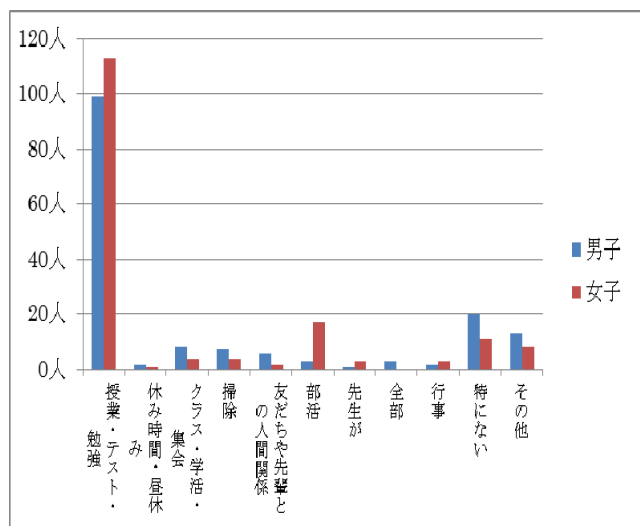


図19 学校生活の中で楽しくない時間 男女別(中3時)

半数以上の生徒が「授業・テスト・勉強」をあげている。苦手な教科の時間をあげたり、教科担任名を挙げたりしている生徒もいた。男女別では、特に「部活」とする答えを女子が多くあげている。同じ傾向が図21にも出ている。楽しくない時間は、中学2年時と中学3年時であまり違いがない。

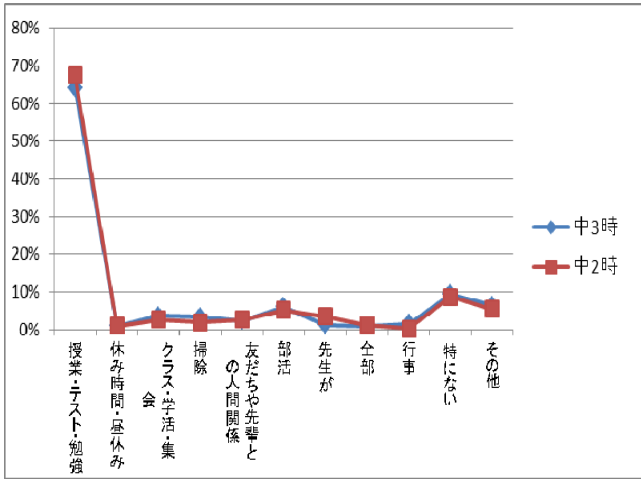


図 20 学校生活の中で楽しくない時間

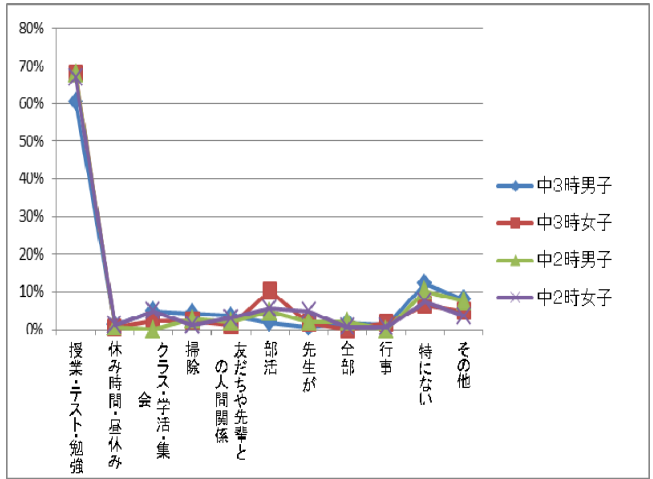


図 21 学校生活の中で楽しくない時間 学年男女別

⑤学校に行きたくないと思ったこと

さらに「学校に行きたくないと思ったことがあるか」についても自由記述で尋ねた。

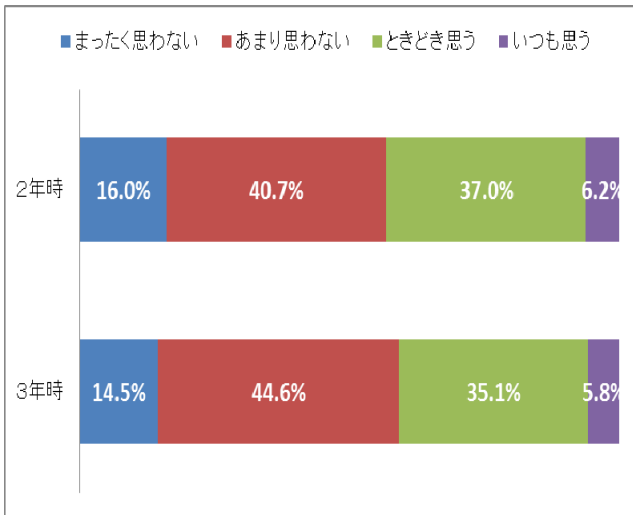


図 22 学校に行きたくないと思ったことの有無

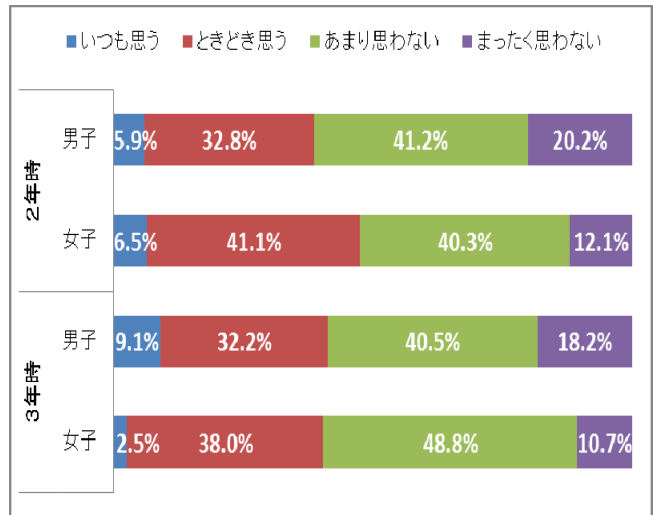


図 23 学校に行きたくないと思ったことの有無 男女別

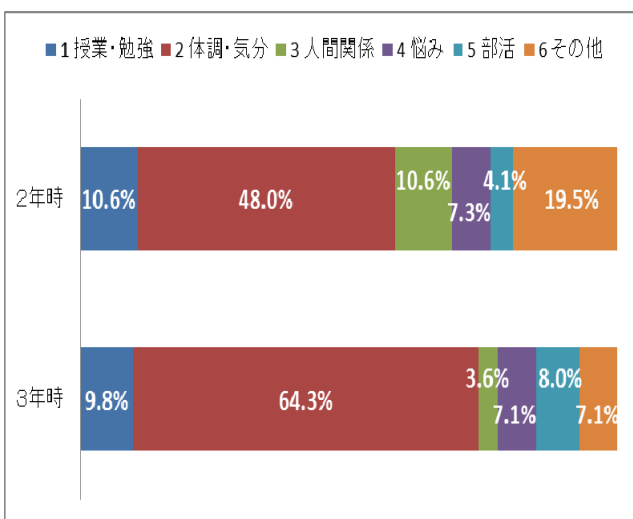


図 24 学校に行きたくないと思った理由

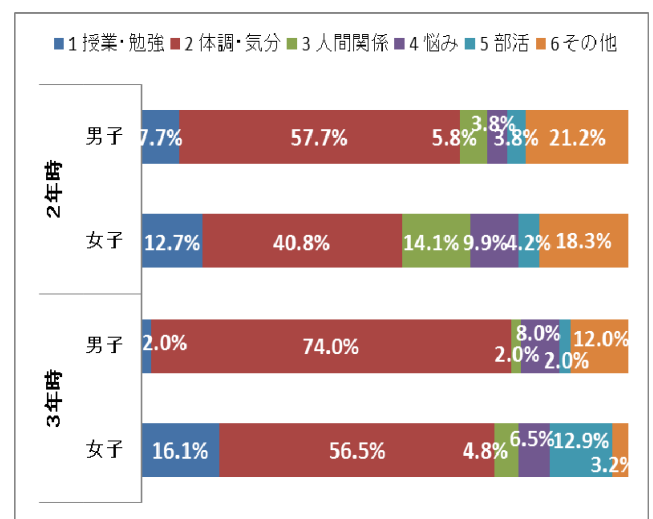


図 25 学校に行きたくないと思った理由 男女別

学年による差は大きくないが、図 22 から中学生 2 年女子で「ときどき思う」「いつも思う」の割合が、他と比べて大きい。

さらに、学校に行きたくないと思うことが「ときどき思う」「いつも思う」と回答した生徒に、「それ

はどのような時か」を自由記述で回答してもらい、その回答内容を分類した。(図 24、図 25)

図 25 から、中学 2 年女子で人間関係や悩みをあげている割合が多い。また、学年が上がるほど、女子より男子が体調や気分をあげている割合が高いことがわかった。

⑥学校に行きたくないと思って休んだこと

「学校に行きたくないと思ったことがあるか」の質問に「ときどき思う」「いつも思う」と回答した生徒には、「休んだことがあるか」を尋ねた。(図 26・図 27)

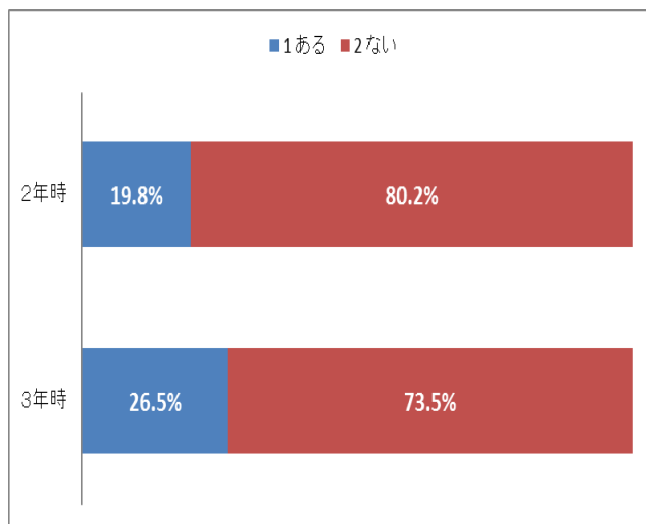


図 26 学校に行きたくないと思って休んだ経験

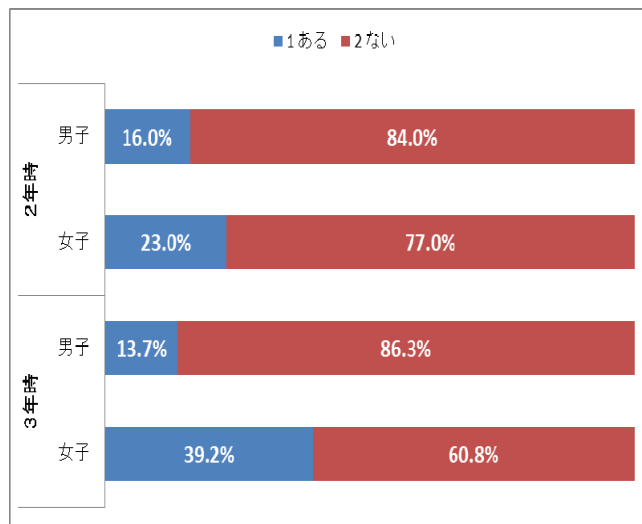


図 27 学校に行きたくないと思って休んだ経験 男女別

「学校に行きたくない」と思って実際に休んだことのある生徒は、中学 2 年時より、中学 3 年時の方が多ことがわかった。各学年ともに、女子の方が休むという行動に結びついている。

さらに、「学校に行きたくないと思っても休まなかった生徒」にその理由を自由記述で尋ねた。「学校に行きたくないと思った時、休まなかった理由」について、9つのカテゴリーが抽出できた。

表 2 学校に行きたくないと思った時、休まなかった理由

カテゴリー一名	内 容
親	”親が行けという””親が休むことを許さない””休むと親に怒られる””親に心配をかけたくない”など、親を休まない理由としてあげているもの
授業・勉強	勉強が遅れたり差がついたりする””勉強しなければいけない””成績が下がる””授業が分からなくなる””楽しい授業がある”など授業や勉強を休まない理由にあげているもの
友だち	”友だちと会える””友だちと話せる””友だちがいるから”など友だちを休まない理由としてあげているもの
部活	”部活が楽しい””部活があるから””部活を休みたくない””部活で差がつく”など、部活を休まない理由としてあげているもの
義務	”義務教育だから””行かなくてはならない””行くべき””行くのが当たり前””正当な欠席理由がない”など、正当な理由がなければ登校すべきであるということを理由としてあげているもの
自分のため	”逃げてはいけない””自分に負けたくない””将来のため””受験・進学のため””出席・欠席日数のため””など、休むことは自分のためにならず、自分自身のために休まないと回答しているもの
消極的理由	”家にいるよりまし””仕方がない””休むと面倒””休むと迷惑をかける””行けばなんとかなる””など、消極的理由をあげているもの
なんとなく	”習慣だから””行くのは普通のことだから””特に理由はない””など、なんとなくという回答をしているもの
楽しいこともある	”楽しいこともある””楽しい時間もある””好きな人がいる””など、楽しいことや好きなことをあげているもの

⑦学校に行きたくないと思ったが、休まなかった

「学校を休みたいと思ったが、休まなかった」理由について自由記述で回答をしてもらったものを男女ごとに示した。

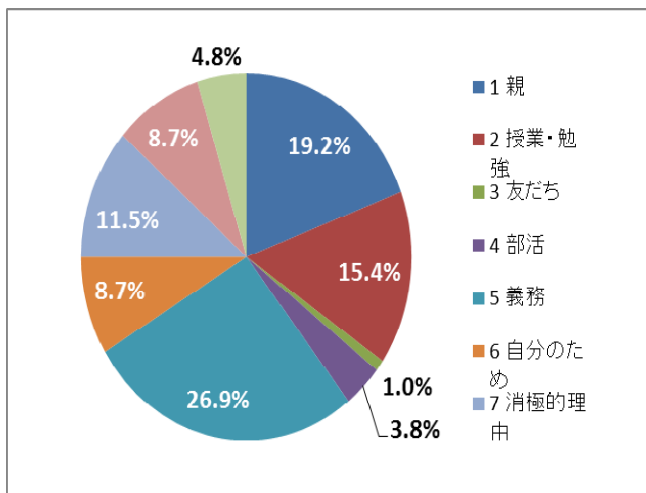


図 28 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(2年)

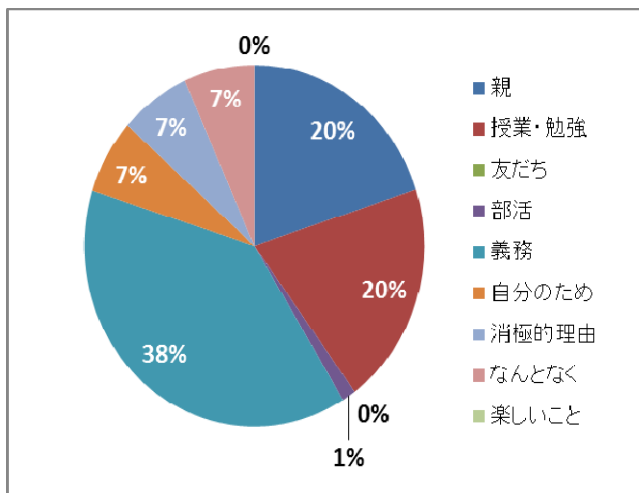


図 29 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(3年)

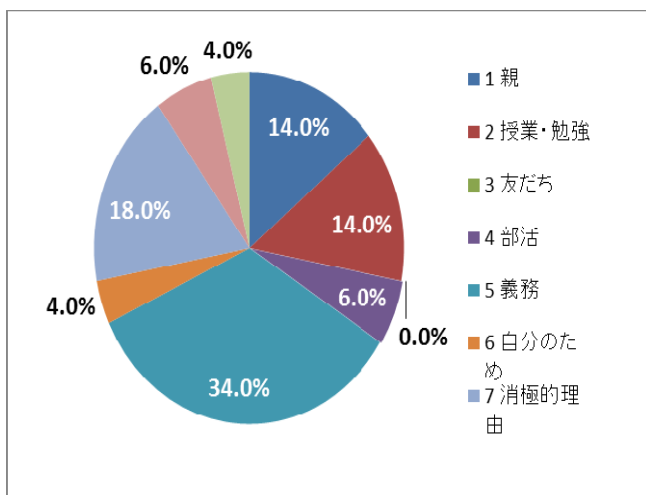


図 30 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(2年男)

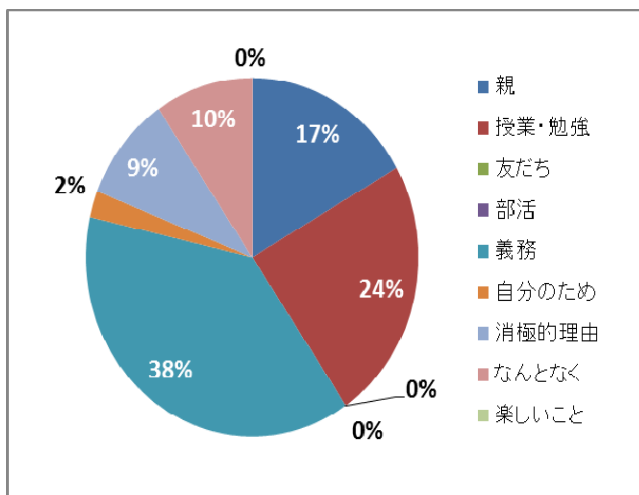


図 31 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(3年男)

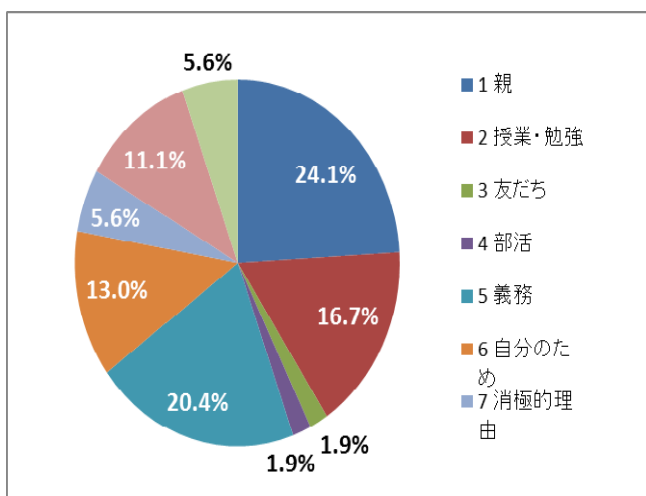


図 32 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(2年女)

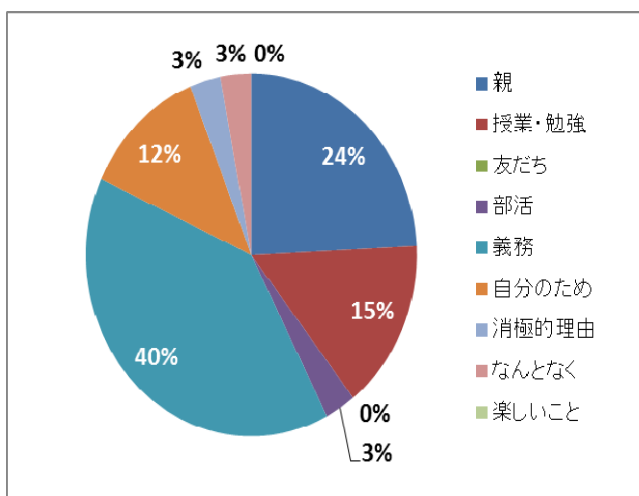


図 33 学校を休みたいと思ったが休まなかった理由(3年女)

学校に行きたくないと思っても休まなかった理由は、中学3年時、中学2年時共に、義務の割合が高い。特に中学3年時がより高くなっている。また、中学3年時では、授業・勉強を理由にあげているの

は男子の方が女子より高く、親、自分のための回答は、女子の方が男子より高かった。中学2年時では、義務と消極的理由は男子の方が女子より高く、親、自分のためとするのは女子の方が男子より高かった。

⑧ハイリスク群

学校享受感情得点 2.0 以下の生徒は、学校嫌いの気持ちが強く、不登校へのリスクが高いと考え、ハイリスク群として取り出して検討した。

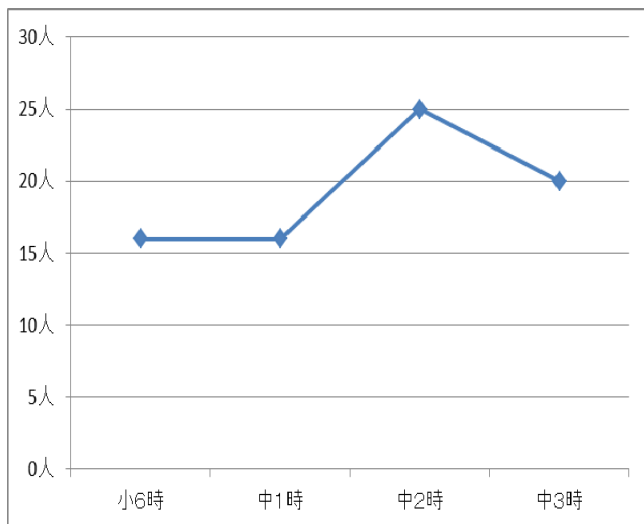


図 34 ハイリスク群の人数の推移

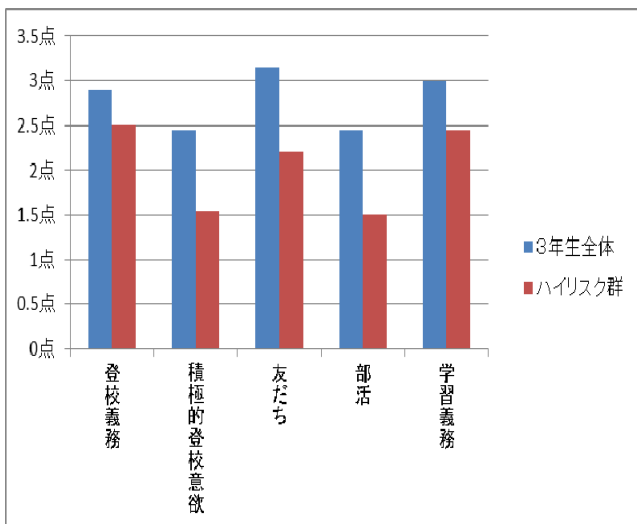


図 35 ハイリスク群と中学3年生全体との登校理由因子得点の比較

ハイリスク群の小学6年時と中学1年時では変化はないが、中学2年時でハイリスク群が増加して、中学3年時でやや減少した。

中学3年時について、学年の生徒全体とハイリスク群の登校理由の各因子の得点平均を比較すると、図 35 のようになった。この結果は、図 12 と同じ傾向を示している。「登校義務」「学習義務」については、ハイリスク群は中学3年生全体より、やや得点が下がる程度であるが、「積極的登校理由」「友だち」「部活」を登校理由とする気持ちは顕著に低くなっている。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究から見えてきたこと

(1) 教職員から見た「中1ギャップ」

小学校と中学校では、子どもの発達段階や担任制度や授業の形態など様々な面での違いがある。小中学校の教職員からの聞き取りにより、その違いを教職員は一言で「文化の違い」と言っている。小中学校での様々な制度の違い等が子どもたちにとって大きなギャップであり、そこにつまずきや戸惑いが生じ、「中1ギャップ」へとつながっていくと考えられている。したがって、そのギャップをなだらかにすることにより子どもたちの不安や戸惑いが軽減され、中1不登校の未然防止が図られると考えた。そのため児童生徒同士の交流、中学校教師による出前授業、小中合同の研修会等様々な小中連携を実践している。

(2) 児童生徒から見た「中1ギャップ」

中学1年生になり、小学6年生の時よりも「学校が好き」と感じている生徒、「学校が嫌い」と感じている生徒が、約同数ずつ存在する。中学校での生活が、新鮮で楽しく、学習や部活に意欲的に取り組んでいる生徒もいれば、小学校との環境の違いに戸惑い、不安感を抱いている生徒もいる。小学校時代

の学校への感情が、そのまま継続するとは限らないことが分かった。つまり、小学校から中学校へのギャップの感じ方は、生徒一人一人の知的能力、社会的能力、運動能力、心理面、健康面、生育・家庭環境、さらに小学6年時の学級がどのような学級であったか等、様々な要因で違ってくるのではないか。

(3) 中学校における友人の存在

学校生活の中での楽しい時間や登校動機として「友だち」の存在が圧倒的に大きいことが示された。中学生の生活は授業を中心とした一日で、そこに部活動をはじめ各種の教育活動が加わり、常に生徒たちの前には課題がある。このように忙しい中学校生活を支えているのは友人である。大多数の生徒たちは仲間とふれあい、助け合いながら過ごしているが、友人関係をうまく構築できず、集団の中にあっても孤立した状態にある生徒は、学校での活動に他の生徒よりも多くのエネルギーを使う。孤独感や自己否定感を伴うために心のエネルギーも低下する。そして、これが繰り返されると心身の両面に疲労が蓄積する。中学校における友人は、小学校における友人の位置づけと質的に変化し、学校生活を支えるリソースそのものになっているのではないか。

(4) 中学2年生の学校享受感情の低下

中学2年時では、学校享受感情が2.0以下である学校嫌いの気持ちの強い生徒が増加する。学校享受感情の得点やその変化量の分布及び、その他の回答等から興味深い結果が出ている。それは、しばしば言われる中学2年生の指導のしづらさ・困難さと結びつくのではないだろうか。中学2年生という時期は学校生活に慣れ、緊張感の緩みや、学習面の理解の差が出て意欲の低下が表面化する。また、部活動では単に楽しいだけでなく、部内の立場や役割、興味関心の変化などが起こったりもする。そのため自分の目標や目的を見失いがちになるとともに、友人関係のトラブル等にも悩むようなことがあり、様々なことで心が揺れ動いているのではないだろうか。

(5) 中学3年生の学校享受感情の変化

中学2年時で低くなった学校享受感情得点が中学3年時になると、小学6年時の数値近くまで高くなった。また、学校生活の中での楽しい時間についての質問に、行事を挙げる生徒が多くいた。それは、最高学年として、様々な活動においてリーダーシップをとったり、またそのリーダーを直接支えたりという役割があり、その役割を通して自己有用感や達成感を味わうことに起因しているのではないか。

また、学校を休まなかった理由は、「出席・欠席日数のため」や「休むと面倒」「仕方がない」など消極的な面もあるが、自分自身を客観的に見つめることができ、自分の在り方の模索や、進学意識等が大きく影響していると考えられる。

2 不登校未然防止に向けて

(1) 小中学校の連携

中1ギャップの解消を図るためには、小中学校間の緊密な連携が必要である。小学校から中学校への接続がスムーズになるように、現在、小中連携を計画的に進めている学校が多い。小学校の高学年における教科担任制や、小中学校間での教師の出前授業及び部活動体験など、様々な取組が試みられている。また、小中連携において大切なことは、9年間という見通しをもって教育活動を展開することと考える。そのためには、子どもたちが小学校及び中学校段階でどのような教育を受け、どのように育っているのか等をお互いに理解することではないか。

(2) 中学1年時の教育相談

① 入学期における教育相談

新しい環境に不安やストレスを抱えている新入生に対しては、担任によるかかわりや配慮が特に大切であり、きめ細かな対応が望まれる。その手立ての一つとして、教育相談の活用・充実を図りたい。入

学から間もない4・5月に1回目の教育相談日を設定し、学校適応感や友人関係など、子ども一人一人の行動面、情緒面の見立てを行い生徒理解に努めるようにしたい。その際、場合によっては、スクールカウンセラーの力を借りることも有効と考える。またこの機会に生徒が困った時、悩んだ時に相談してみようと思う気持ちになるような、きっかけづくりになればよいのではないだろうか。

②学習面をサポートする教育相談

中学校での学習が本格的に始まり、学習面でのつまずきや戸惑いが表面化する時期に、学習を中心とした教育相談を行うことが必要ではないか。現在の2学期制を考えると、夏休み前にクラス担任が各教科担任と連携し、より具体的な学習についてのアドバイスを行う教育相談を設定することが有効であるとする。その後、継続していくことで、気持ちに寄り添った丁寧なサポートが実現できると思われる。

(3) 中学2年生の生徒理解

中学2年生は、中学校生活にも慣れ、抱いていた希望や期待感も薄らいでくる時期である。学習面や部活等において、自己の理想と現実の自分の違いが見えてくる。部活動や諸行事においては3年生のように中心的存在として活躍する場面が少なく、また後輩という存在ができ、3年生と1年生とのほざまでつらい思いをし、達成感や成就感を味わう機会もなかなかもてない状況が考えられる。そのような中で、学習や部活動等において、あきらめ感や挫折感が表面化してくるのではないか。このように難しい時期の生徒の気持ちを教師はしっかりと認め、受けとめることが大切である。教師は、その生徒が頑張っているのにできないのか、あきらめているのかなど、一人一人の行動などをよく観察し、ほめながら励ましていくことが必要である。生徒は、それによって具体的な目標や目的がもてるようになるのではないか。

(4) 中学3年生の生徒理解

中学3年生は最高学年となるため、部活動や諸行事等において常に最前線での活躍が期待され、下級生の手本となったり面倒を見るなど責任のかかる立場にいる。その一方で初めての進路選択を控え、希望や期待、不安など様々な思いに心が揺れている時でもある。自分の行先をただ決めるのではなく、自分の生き方や在り方について考え、自己理解を深められるような働きかけをしていきたい。そのために、教師はいろいろな機会をとらえて、生徒と会話をするように心がけたい。生徒の考えや気持ちを知るように努力するとともに、生徒自身の持ち味や長所を伝えていくことも大切と考える。また、生徒と保護者間では、進路希望の考えに食い違いが生じている場合が少なくない。両者の話を受けとめ、保護者に理解と協力を求めながら、進路を決めようとする生徒の姿勢を支えるように努めていきたい。

不登校を生まない取組として魅力ある学校づくりを実現することは欠かせない手立てである。学校生活の大半は教科の授業である。学校享受感情の変化と「学習意欲」の得点は連動していることがわかった。このことからきめ細かい教科指導の実施や学ぶ意欲を育む指導の充実は欠かせない取組である。また、対人関係の改善も図っていかなければならない。他人との関係の中での自己の存在を感じとらせることや人とかわかることの苦手意識の軽減や克服が必要である。それには学級という単位にこだわることなく、学校行事や体験活動の機会を積極的に活かして対人関係の改善を図り、自己有用感・自己存在感などを生徒自身に感じとらせるような教育活動をしていくことではないだろうか。

子ども理解の手立てとしては、調査研究で使用した質問紙や共生共育プログラムの効果測定も有効な活用資源と考える。

最後に4年間にわたり、本研究に対するご指導、ご助言を賜りました鶴養美昭先生、高橋美枝先生、及び調査にご協力いただいた川崎市立小学校・中学校の校長先生並びに職員の皆様に、心より感謝を申し上げます。

【参考文献・資料】

- ・児島邦宏、佐野金吾 編 『中1ギャップの克服プログラム』明治図書 2006年
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター「不登校未然防止に取り組むために」 2003年
- ・平成19年度「問題を抱える子ども等の自立支援事業」調査研究報告書 2008年
- ・平成20年度「問題を抱える子ども等の自立支援事業」調査研究報告書 2009年
- ・平成21年度「問題を抱える子ども等の自立支援事業」調査研究報告書 2010年
- ・文部科学省・川崎市「学校基本調査」(速報) 2011年

【指導助言者】

日本女子大学人間社会学部心理学科教授 同大学学園カウンセリングセンター長

鶴養 美昭

日本女子大学人間社会学部学術研究員・非常勤講師

高橋 美枝